

語る

時空が起きて、衝撃を受けました。テロリストを入管をならなく入管の使命の重大さを認識した。外国人は問題を起す可能性があるので、厳格に管理するべきだと思っていました。

以上なら一家を在特にしないで、小学生以下だと強制送還してしました。しかし、小学生でも自我もあれば希望もある。「本国に帰っても、やり直せる」と言っているのは嘘です。

出入管は2004年か出さなくなった。子どもだけだなく、日本人と結婚した外国人に対しても厳格になりました。

行い、古巣の改革を訴えている。入管で収容中の外国人の死亡が相次ぎ、注目を集めています。入管の職員は世間で言われているほど、人権感覚が鈍いわけではなく、疑問を感している人は

音楽の視点で 芸術振り返る 竹久夢二美術館



竹久夢二が表紙の絵を描いた「セノオオ楽譜」の「宵待草」(1934年)

明治から昭和初期にかけて書寫機で楽しまれたSPレコードや、画家竹久夢二による楽譜の表紙絵などの



北海道警や札幌地裁の控訴審判決で、札幌高裁の判決を批判する紙を掲げる原告の大杉雅栄さん(左)と桃井希生さん(右)＝6月22日

いたとして警察官の行為は適法と判断、逆転敗訴した。この事件については、映画化もされ上映中である。

人のスマホは特例的に許されているものの、ほぼ全面的に記録が禁止されている実情がある。報道人も含め傍聴人のPC利用や録音などが、正面から議論されるきっかけになることを願う。

ポイント付与により発行枚数は急増したものの手数料が相次ぎ、国家情報管理システムとしての決定的な問題を浮き彫りにしている。さらに保険証については、謄写も暗証番号もなしで

続けて6月には改正審査法が成立、マイナンバーカードと健康保険証の一体化や、マイナンバーの利用範囲が拡大することになった。

ポイント付与により発行枚数は急増したものの手数料が相次ぎ、国家情報管理システムとしての決定的な問題を浮き彫りにしている。さらに保険証については、謄写も暗証番号もなしで

生成AIについての議論も一気に進む。6月に欧州議会は生成AI関連データの開示を義務付けた規制法案を採択、今月にはG7で国際的な包括ルール作りが合意され、日本でも法制化や自主的なガイドライン作

積み重なる司法判断 報道による検証望まれる

21年には「表現の不自由展かんざい」を巡り表現の自由の観点から施設利用を認めない司法判断が確定し、その後のイベント開催の道

を開いたが、表現の自由が争われた事案で、判例により実効的な保障が積み重ねられることには大きな意義がある。

司法の閉鎖性は以前から大きな課題ではあるが、5月には廷廷との弁護士録音を巡り、弁護士が手錠で拘束され退廷となり、「制裁裁判」にかけられ過料を命じられる事件が起きた。裁判所の訴訟規則では、裁判官の許可なしに録音や撮影などはできないと定められている。

現在では開廷前の報道機関による廷内撮影や、傍聴

の発行を認め、仮保険証の発行も自動交付に切り替えるなど、政府のIT保険証への固執が目立つ。報道量も増えているものの、重大な個人情報漏洩である事故を「作業ミス」と報ずることで矮小化が行われてはいないか。さらに言えば、この制度そのものの欠陥に踏み込む必要もある。

わが国にあっては、マイナンバーカードの普及率は、マイナンバーカード(マイナバーカード)義務化だ。そのため改正省令の施行が4月にあり、

6月には性的骚扰撮影禁止法が成立、「撮影罪」が新設された。女性スリートの盗撮などは対象から除外し「規制の枠敷を定める。同月には自民党ほかの議員立法によるLGBT理解増進法も成立しているが、いずれも表現行為がかわるだけに今後の運用が注視される。

「私はフリーハグが嫌い」展



山田 健太

21年には「表現の不自由展かんざい」を巡り表現の自由の観点から施設利用を認めない司法判断が確定し、その後のイベント開催の道

が確定した。

時評 (12月)

文化

引き続き、この1年間の言論・表現の自由関連の判例や法制状況を振り返る。

芸術作品に関する助成金交付についての初の最高裁判断だった。映画「宮本から君へ」への助成金を決定後、出演者の薬物事件を理由に不交付としたのは違法だとして、映画製作・配給会社スターサンズが日本芸術文化振興会に不交付決定の取り消しを求めた訴訟で最高裁は11月、不交付は著しく妥当性を欠き、違法」とし、同社の逆転勝訴

不明

一部勝訴

不明

不明

不明

見聞録

フリーハグとは、街頭で人と抱擁を交わすこと。本来、個人的な選好を確認する抱擁を見知らぬ者に強いることで、平和といった普遍的な訴えを訴えることが多い。特に愛や平和に満ちた世に表現に直結するわけだが、その価値を広くしめる象徴的行為である。東京都港区の国立新館で「渡辺篤(アトムプロジェクト) 私フリーハグが嫌い」展が、もりで、インターネットに出会ったひきもり君と対話を重ね、対面しつづける共同作業を続ける。名前も本性も知らず、他者と抱擁するフリーハグとは対照的に、名前も内面も知らず、ただ、磨き合っているのは、刃が参加者どうしである。ライトボックス。その背面は重厚な扉で、スコープからは光が漏れる。扉の厚さはひき